

本多狷下の三大名著

法華經要義

法華經の教義を整理し極めて平易懇切に講述せられ、今回特に臨天覽、供養覽、空前の好著なり。

四六判 六百數十頁  
 總假名付  
 定價 金參圓

日蓮主義の心髓

法華經要義の姉妹篇なり、日蓮主義の精髓を領得せんと欲する者の必須欲くべからざる良書なり。

四六判 三百五十餘頁  
 總假名付  
 定價 金壹圓八十錢

日蓮主義精要

十二篇に分類し教義信條の整理歸結を懇説せるもの、誰人にも易々として理解の金鍵を與へらる、空前の指針、大燈明の賞讃あり。

四六判 七百餘頁  
 總假名付  
 定價 金參圓五十錢

「教」發行所

價定一統			料告廣一統		
一	半	一	表	一	表
ヶ	ヶ	冊	紙	頁	紙
年	年	金貳拾錢	頁	頁	頁
年	年	金壹圓貳拾錢	金	金	金
金貳圓貳拾錢	金壹圓貳拾錢	拾	拾	拾	拾
送料共	送料共	圓	圓	圓	圓
事之金前	事之金前	圓	圓	圓	圓
五厘	五厘	圓	圓	圓	圓

昭和五年二月廿四日印刷精本 (第四百二十號)  
 昭和五年三月一日發行

不許複製

編輯人 磯部滿事  
 發行人 鈴木日雄  
 印刷所 東京府在原郡品川町南品川百八十一番地  
 印刷所 東京都印刷所  
 電話高輪六〇二四番  
 東京府在原郡品川町南品川四百十二番地  
 編輯事務所ハ發行所ニテ取扱フ  
 電話東京五一〇七一番

目次

本感應妙を信じて……………	本多日生
天風三萬里紀行(其九)……………	小林日種
常樂院日經上人御消息……………	………
記	事……………
○北米の野口上人の通信	
○各地教報	
○護法護國	
○誌料領收	

第三十五年四月號



光

# 本感應妙を信じて

大僧正 本多日生

一月以來の私の病氣に就きまして皆さんからいろいろ鄭重なる御見舞状などに預かりまして、一々御挨拶も致さなかつたのでありますが、この機会に於て厚く御禮を申述べると次第であります。

こんどの病氣は、去る一月の統一閣の新年宴會に出席を致した當時は、別段故障もなかつたやうでありましたけれども、その後十三日に同志の人達を集めて話をした事がありました。その時少し悪寒がするやうに考へました。すると十四日、十五日とだん／＼發熱して参りました。約十日間ほどの間は、約そ四十度ほどの熱でありました。その間に食物を攝らないものでありますから、身體の衰弱も起るし、胃腸が悪くなつて食事が殆んど出来ない、それに腎

臓に故障を起して、大分激しく悪くなつて來ました。それから身體が幾らか痺れるやうな氣味もあり、頭腦の調子も、熱があつた爲か工合が悪いといふやうなことで、四つ五つの病狀がそこに現はれて來ました。その外に以前から少し故障のあるやうに思はれた心臓とか呼吸器といふものも、自然その發熱の影響を受けて悪くなつたものでありますから、丁度算へて見ると七つほどの病狀が一時に現はれて來たやうな譯であります。

以前から私の病氣はどうも一筋のものでなくして、混合的のものだとは自分でも考へて居つたのであります。丁度一昨年の秋頃からだん／＼身體の調子が悪くなつて居りまして、十二月十六日に恩賞祝

賀會を統一閣で開かれた際に、それから歸つて以來ズツと悪くなり、一昨年の冬も悪かつたのであります。併し毎月地方に布教に行かなければならぬものでありますから、随分無理をして出張して居つたのであります。その度毎に、その一回の出張約十日間ほどの巡回を、無事で歸れば誠に結構だ、或は途中で心臓の故障とか腦溢血とかいふことで斃れるかも知れぬ、どうも常に演説などをし歩いて居る人は、私共の知己でもさういふ急激な病気で斃れる者が多いのでありますから、或は名古屋で死ぬか、大阪で死ぬかといふやうな事も始終自分だけでは考へて、若し無事に歸つて来れば大勝利だといふやうな風に思つて出張したことは三四回もあつたのであります。昨年も引續いて身體の調子が本當に快くならず、十一月に地方に參る時分にもさういふ風に思つて參りましたが、幸に無事でありました。その後どうもグズグズして居りまして、病氣が快いとも悪い

いかぬと言つて、周囲の者が頻りに止めるので切ることが出来ないそれが、幸に内部の方へ破れて窓へたのであります。それは病氣と言つたところで、一生懸命に書物を書いた爲に肩が張つて凝が出来たやうなものでありますから、疲勞はしたけれども、大した事ではなかつたのであります。そのズツと前、今から三十四五年前に、一度黄疽に罹つた事があります、それも黄疽には二種あるといふことで、私の場合は肝臓を壓迫した爲に發つたのであります。その壓迫といふのは、品川の寺は相當境内が廣いのであります、納所共が草を除くのにも掃除の仕方が汚なくて氣に入らない、それから「そんなやり方では駄目ぢやないか」といふので、自分でやり出して朝から晩まで、一日やればこの位出来るぞといふことを示さうと思つて、屈み込んで一生懸命草を除いた、ところが腰巻の紐がだん／＼に喰込んで肝臓に壓迫を加へて居るのを知らなかつた、その壓迫

ともわからぬやうな風で、一向捗々しくないので自分でも困つて居りましたが、今申す今年の一月の十三日になりました、まア普通に言へば感冒といふやうなものでありますけれども、何だかわからない發熱がして參つて、それに續いて七つほどの病症が歴然とそこへ現はれて參りました。そこで私自身には「は、ア是だナ、これでハッキリして来た、今迄はこれが沈滞して居るものだから、何だか始終身體の工合が悪かつたのだナ」と思つて居りました。けれども殆んど私は平常醫者にかゝつた事がないので、自分の記憶ではモウ二十五六年前、丁度「法華經講義」を書いた時分に非常に肩が凝つて、その結果顔が腫れ上つて、口が開かなくなつてしまつた事がある、それが爲に二週間も食事が出来ないので流動物ばかりを攝つて居つた爲に非常に身體が瘦せました。その顔面の腫は外部から切開すれば宜いのでありますけれども、宗教家が顔に切開が出来ては

の爲に非常な發熱をして来たことがある。けれどもその時分は若くもあるし、少々ぐらゐの病氣で布教に行くのを休んだりする事が私は非常に嫌ひでありましたから、熱のある儘汽車に乗つて、松尾忍水を隨行にしてその翌日岡山に出かけました。その時に小水の色は醬油のやうな色になつて居ることは出發前に認めて居つたのでありますけれども、「ナーニこの位の熱は關はぬ」といふので汽車に乗つて行きましたが、途中どうも身體の工合が悪いので、大津まで行つた時に、これは一つ驛の前の旅館で晝飯を食つて、一汽車後の汽車で行くことにしようといふので降りた。ところがどうもだるくて仕方がないので絨氈の敷いてある所に横になつて居つたら、松尾が、「あなたの顔色とこの絨氈の黄色い唐草模様と同じやうな色です」と言ふ、「そんなバカな事はなからう」と言つて手を見ると、非常に黄色を帯びて居るやうな譯で、どうも氣分が快くない。それから少し

ばかりしか飯は食へなかつたけれども、とにかく食事をして又汽車に乗つて岡山に行きました。するとモウ豫定の時間が切迫して居るから澤山の信者が參つて居るといふことで、休む暇もなくスグに演壇に登つて演説を始めた、ところが十五分ばかり演説すると急に眼が眩んで演壇で倒れてしまつた事がある。さうすると聴衆の信者の中に醫者も二人ばかり居りましたから、スグ飛んで来て診て呉れた結果、今言ふ通り黄疽だから、是は動かしてはいけないといふ、それからツーツと座敷に抱いて行かれて、少しも動くことが出来ない、便所にも行けなければ飯を食ふナンといふことは逆もいかぬといふ譯で、それから毎日ホンの盃に三ばい位づつのスープを攝つて寝て居つた。さうして二週間ほどで大體快くなつて、まだ身體はヒョロ／＼して居つたけれども、又その儘汽車に乗つて東京に歸つて來た事があります。

その時がまアチョット病氣のやうな形ですけれども、それも今言ふ通り腰巻の紐から發つたといふ原因がハッキリして居る。一度は「法華經講義」を書いた爲に發つたといふのである。それが私が物心が附いてから二度の病氣らしい病氣でありますけれども、原因がそんな工合でありますから、「ナーニ自分の身體に容易に病氣などは發らね」といふ風な考で、今度も四十度ほどの發熱が十三日から十日間續いて居つたけれども、醫者にかゝるといふやうな感じも起さず、周囲の者にも、大してエライやうな事も言はず、たい布團の中に頭を突込んでチツとして休ませて居れば治ると思つて居つた。ところがナカ／＼治らぬ、終ひには非常に衰弱を感じて來て、からだ中に力のある所は何處にも無いといふことがわかつて來た。それから是はどうしても醫者にかゝらなければいくまいといふので、二十三日になつて漸く醫者にかゝつた、醫者はまアいろ／＼の事を言つて藥を

呉れたのでその藥を飲んで居つた。幸に約一週間ほどするとだん／＼快くなつて來た、その後は次第に快方に向つて、今では胃腸はモウ全部平常の通り健康になつた、腎臟の方は早く癒つてしまつた、それから頭腦の調子はまだ少し工合が悪いですけれども、併しだん／＼快い譯でありまして是は自然に癒るだらうと思ふ。身體の痺れて居る工合がまだ本當に取れない、左の足の裏と、右の手の小指の邊が少し痺れる氣味で非常に氣持が悪いけれども、醫者は別段大した原因があるのではない、血が減つて居るからそんなことになるので、だん／＼體力が回復すれば自然に癒るから擲つて置いたら宜いでせうといふので、別段その方の治療はして居ない譯であります。

そこでまア五つほどの病症は片づいて來た譯で、頭腦の方もだん／＼良くなり、痺れも自然に除れると思ふ。心臓と呼吸器も快くなつて、今日は歩いて

見ても呼吸もあまり切れないし、お經を讀んで見ても聲の出工合が續くやうになつて來た。私は元來隨分聲量があつたので、お經を讀む分量などは普通の人よりよほど永く息も續いたのでありますが、それが一時は普通の人の三分の一位しか息が續かなくなつて居つた。今日讀んで見ると聲量が半分ぐらゐ回復して居ることを認める、これは私としては非常なことなので、聲量の三分の一が二分の一になつたといふことは、演説をしたりお經を讀んだりする上に非常に樂になつた。一時は殆んど聲量が三分の一になつて、それでお經を讀んだり演説をするといふことは實に苦痛な事でありましたが、併し私の師匠は死ぬまで説教をしたのでありますから、それで私もどんなに辛くともやつて居るのであります、普通の人では到底演説などは出來ないやうな事も是までも隨分數多くあつたのであります。身體が強壯でも何も故障なく演説の出來る時には、私の演説は爽快

であつたかとも思ふ。所がいつでも半病人どころではない、七分病人みたいなものが何年も演説して居る譯である。今日なども漸く一昨日初めて戸外を歩いたので、昨日は少しも歩かないのであります、普通の人ならばやはりヒヨロ／＼する譯ですけれども、今斯うして演壇に立つて見れば何ともない、足の方は少しヒヨロ／＼して居るけれども、兩方の手でテーブルを押へて居れば演説中一向差支ないのです。

さういふやうな次第で先づ七つの病氣の五つは全快したと言つてよろしい、心臓と呼吸器は今後モウ二三ヶ月大事にして治療したならば、又よほど回復して、御用を動かめることが出来ようかと考へて居るのであります。そこでこの病中に私の非常に深く感じた事がありますから、その感想に因んで今日は「本感應妙を信じて」といふ講題の下にお話をして見たらと思ひます。

前に申す通り、今まではこれぞといふ病氣に罹つた事がありませぬから、未だ曾て病氣で死ぬとか、病氣で弱つたといふやうなことは、今日まで殆んど考へなかつたのであります。以前の顔の腫れた時分にも、自分でこれを引切つてしまへば宜いのだと思ひまして、とう／＼終ひには自分で引切つてそれで癒つたのであります。その前の黄疽の時にも、ナ―十日間ぐらゐる食はずに居ることは何でもない、醫者はなか／＼サウ急に癒らぬといふのを約二週間で癒してしまつたやうな譯でありますから、病氣に罹つても病氣を征服するとか、病氣に敗けないとかいふやうなことは非常に強く私は考へて居る。今度あたりでも病氣に敗けるナンといふ感じは決して有たないつもりで居つた。ところが前に言ふやうに非常に身體が衰弱して、足なども非常に細くなつてしまつて、押へて見るとフワ／＼して、何處にもサツバリ力といふものがない。腹は胃腸を損じてしまつ

て居るからビシヤンと凹んで居る、これはチョット餘病が出たならば死ぬかも知れん、肺炎になるかも知れぬ」といふことを素人ながら考へて居つた。この上に肺炎でも併發したらモウ最期である、併し無論それが爲に狼狽へるやうな事はない譯でありますけれども、少し心細いやうな氣もしました。

そこで考へて見ると、まだ／＼護法の爲に盡さなければならぬ事がだん／＼あるのであります、自分の餘命を以て護法に盡す必要があるならば、いまま少し生き永らへさして貰ひたいものであるといふやうな事がふと胸に浮びまして、それから一心に本佛釋迦如來に對してその事を祈願しました。併し一面には「イヤそんな事を思つてもモウ壽命が来たのだらう」といふ風にも考へました。それは私が平常考へて居るのに、日蓮聖人の入滅せられたのが六十一歳であります、これは一代の間非常な奮闘激戦を遊ばされた上に、殊に晩年身延に入山になつて寒氣の

中に居られたために御壽命が短かつたかと思ふのであります、それにしても六十一歳であります。私の父が六十一歳で東京で歿なつたのであります、それから私の師匠が東京の盛泰寺でやはり六十一歳で寂なりました。日蓮聖人と申し、父と云ひ師匠といひ、皆六十一歳でありますから、私も六十一歳になればモウやはり死ぬ年が来たのかといふ風な考もあつた。そこへ持つて来て今度斯ういふ激しい病氣になつたのでありますから、今度は定命であれば是は己むを得ない、別段死ぬからといつて特にごだけの事を考へんならぬといふやうなことも思ひませんでした。それは仕方がない、併し生きてモウ働きたいといふ氣分は、まだ心の奥に残つて居つたものですから、護法の爲に私が生き永らへる必要がありますればどうか壽命を延して貰ひたいといふことを、病間に一心に祈願しました。

ところが自分の得手勝手な判断かも知れませぬ

が「それはまだお前は死なぬ方が宜からう」とお釋迦様が仰しやるやうな氣持がしたのであります。そこで「それならばどうぞモウ少し生きさせて貰ひたい、その代りにこれで死んだものと考へて働かます」とさういふ風な祈願を籠め、さういふ事を考へさせたときに、非常な強い力が起りました、身體は瘠せ衰へてしまつて居つたけれども、精神力としては、その本佛の感應を信じ、自分の護法の責任に顧みたるときには、勇心勃然として、この身を支へることも出来ない、弱り果て、蟲の息のやうになつて居る自分の身に、洵に強い力を感しました。その強い力が、病氣回復の根本原因になつたと思ふのでありまして、それから初めて熱もだん／＼去り、次第に快くなつて參つたのであります。今日にしては不思議の前に言ふ通りに五つの病症が全癒した外に、心臟と呼吸器の工合が快くなつて來て居る、不思議な事だと思つて居ります。身體が非常に悪くなつたり、

さういふ風な病症が發つたのでありますから、他は瘡つても一層心臟などが悪くなつて居るべきであるのに、その方が快くなつて來た。これは即ち私が護法の爲に働くといふには、言論の方もこれを全然廢める譯にはどうしてもいかなない事情があります、私だけとしては黙つて書物を書いて居つても護法の勤が出来ると思ひますけれども、やはり幾らか物が言へなければ護法の爲に困る譯である。それで今度の心臟や呼吸器が快くなつて來居るこの状態は、全く本佛の感應利益の結果のやうに自分は考へるのであります。幸にしてこれが今少しく快くなりますれば、洵に有難いことに考へるのであります。それに就て自分が本佛釋尊を信じて居る意味合を少しく内容に入つてお話しして見たい、それが講題に掲げた「本感應妙」といふことになるのであります。

「感應」といふことはこれをよく了解しなければな

らぬのであります。宗教の信仰の中にはいろいろの意味合があつて、或は自分の罪を赦して貰ふところの懺悔といふやうな事から發る信仰もあり、或は信心することが功德善根になるといふので、その功德善根といふことを以て自分の罪を贖ふとか、徳を積むといふやうな道徳性から進んで來る信仰もあり、或はそれに依つて自分が佛様に成れる、モウ再び生死流轉といつて死んだり迷つたりすることのないやうな、實在不滅の如來になれるといふ、實在を念じて發るものもあります。或はいろ／＼の事を研究した結果、どうしても宗教の信仰に入らなければならぬ、それは詳しく言へば長い話になりますが、さういふ知識の結論に於て信仰に入る者もあるのです。ところがそれ等の懺悔的宗教心とか、道義的宗教心とか、實在的宗教心とか、推理的宗教心とかいふやうな宗教心よりも、宗教の本質的正面に立つて居るものは感應の信仰であると思ふのであります。

感應の信仰といふのは「感」は自分が感心することとで、有難いと心に感ずることを感といふのであります。「應」といふのは佛様の方からその有難いと考へて居る氣分に應じて救済の力を與へられる方を言ふのであります。「感」は自分であり、「應」は佛の方であつて、丁度譬へて見れば「感」といふ方は水のやうなものである。清水が此處に在る、盥なら盥に水がある、さうすると月が天に出て居る、その水のあるところに月が映る、それは月の方が「應」じたといふことになるのであります。盥に水が無ければ感は無いので、人ありと雖も信仰の心、有難いといふ心がなければ盥に水が無いやうなものである。それが佛教の話の聴いたり、或る事に感じてさうして有難いといふ氣分が起れば、盥に水を汲んだやうなものであつて、そこに月が映るのであります。その天月が清水に映るところの有様をこれを「感應」と申すのである。これが宗教の本質であつて、人間の宗教

心といふのは、簡単に言へば有難いといふ宇宙の絶對者に對するところの感激の精神、これが宗教であります。さうすればその尊い、人間以上の偉大な力を有つて居られる方が、それを救ふべくそこに力をお下しになるのが「應」といふことであります。

それが低いところの感應になるといふと、宇宙の絶對の力ナンといふことを考へないで、向ふのお稻荷さんがどういふ事をして呉れるだらうとか、こっちのお宮はどんな御利益があるだらうとか、不動さんの所に行けば火事を守つて呉れるとか、観音さんの所に行けば子供を生まして呉れるといふやうな事から、大勢の人が押かけて行くのであるけれども、さういふ行き方はこれは枝葉の行き方であつて、どうしても宗教は自分の心の奥底から燃えて來るところの本當の有難いといふ感じを以て、この廣き天地宇宙の絶對者といふ一番偉い人格者を認めて、それに結合しなければならぬものである。

の女房に感心するやうなことになる、それも悪い事でもないけれども、眞實の宗教にはならない。

そこでその「感應」といふことにさういふ枝葉の氣分を斥ける言葉が「本」といふ一字の尊い所である。それは狐だとか狸だとかいふやうな小さな所ばかりではない、一切の崇拜物、凡そ人間が崇敬を捧げて居るあらゆる尊いもの、佛教の内で言うたならば阿彌陀様でも、お薬師様でも、観音様でも、又佛教以外から言へば婆羅門の神様でも、基督教の神様でも、あらゆる人類の文化に現はれて居るところの崇拜物のすべてに對して、それより以上の根本の尊さを持つといふことを見極めた所に「本」といふ一字があるのである。ちようど日本で言へば天子様に對して感激するのが日本國民道德の本當の感心の仕方であるから、これが國民道德の根本であるが如くに、この感應の根本を突留めて居るところに「本」といふ字が附いて居るのであります。

ちようど國民道德で言うたならば、日本に偉い人は幾らもあるけれども、隣りの床屋の親爺は朝早く起きて働く、エライ者だとか、こつちの八百屋の女房は一日棒がけてよく働く、エライ者だとか……そんな事をいくら感心して居つても（それも悪い事ではないけれども）國民道德の根本にはならない。日本人として尊敬を捧ぐべき中心は何處に在るかといふことになる、即ち萬世一系の天皇を戴いて、その天皇の御聖徳が有難いといふことに感激すれば、その感激の精神が國民道德の中心になるのである。それは國家といふ範疇に於て最も大事なことであるが、宗教は天地宇宙の絶對者の一番尊い者に向つて感激する事ナンである。それを隣りに祀つてあるお稻荷さんがどうしたとか、向ふのお地藏さんがどうしたとかいふやうな、さういふ建物や木像みたいなものから起つて來るのは、それはホンの部分的のものであつて、ちようど隣家の床屋の親爺や、八百屋

さういふ風な大事な事柄を、根本を突留めて有難く思ふその意味合が、法華經の壽量品には十あるのであります。佛様を有難く考へる感應といふことに就ても、根本を突留めたとき、お釋迦様の尊さが本當に身に泌みて來る譯ナンであります。それは天台大師が壽量品の事を講ぜられた時にすらも「本門の十妙」と申して、壽量品に就て勝れて居る意味合を十擧げられた、その中に「本感應妙」といふ事があるのであります。「本」の字は今言ふ通りに、さういふ途中の有難さでなくして、根本の有難さに行く譯であります。それ故に天台大師は三つの事柄で「本感應」といふことを表はして居る。これは「法華文句」といふ書物の十妙の下に出て居ることであるが、先づ本ならざる感應といふものを三つ擧げて居る。それは、

- 一に始成の故に
- 二に不同の故に

三に拂はるゝが故に

といふことである、この事を了解すれば、本佛の尊さがいよ／＼明瞭になる譯であります。同じ有難いやうに見えても、佛法の中の樂師經を讀めば樂師如來が有難くなる、阿彌陀經を讀めば阿彌陀様が有難くなる、ごつちが上やら下やらわからぬ、それは淨土宗から言へば阿彌陀様の方がいゝ、眞言から言へば大日如來がいゝ、法華から言へばお釋迦様がいゝと言ふだらう、喧嘩はまア五分々々だといふやうな事を言うて居るのが、佛法に就て不明な日本人達であつた。これを教へる爲に日蓮聖人は命に懸けて闘はれたのである。そんな事はどうでも宜いといふならば、日蓮聖人の身命を賭して闘はれた事は無意義であつたといふことになる。今まだ日本人の思想の状態では、サウ深入して論じてても、佛敎全體の有難味さへも了解しないのであるから、内容に入つての優劣などはあまり論じてても仕方がないやうであ

るけれども、それは日本の文化がまだ本當に進まないのである。佛敎を取入れて千三百年も経つて居るけれども、今なほ佛敎が有難いのか有難くないのか、その内容に入つてどういふ方向を辿るかといふことがハツキリせぬといふことは、宗敎に關する日本人の不明である。日蓮聖人の奮闘が悪いのではない、日蓮聖人の主張を了解する程度に宗敎思想が進歩しないのは、眞に日本の爲に愾くべき事である。そこで今の天台大師の言はれた三つの事柄を、わかり易くお話し置きたい。第一は「始成の故に」といふのは、お釋迦様が護つて下されるといつても、今度天竺に出て悉達太子から修行を積んで初めて佛に成られた方である、その佛に成られる迄に吾々を護るといふことも出来ない、佛に成られてから初めて慈悲の心が動いて吾々を護るやうになつたといふことであつて見れば、その前の者には關係もないし、又そこから初めて起つた慈悲とすれば慈悲も

淺い譯であるといふことになる。「始成」といふのは始めて成佛するといふことで、悉達太子が天竺の伽耶城に於て始めて成佛をしたものだとして、そこから感應を論じて來る、さういふものは本感應とは言へないのである。

さうすれば本感應といふのはどうかといふと、久遠實成といつて、お釋迦様は今度始めて佛に成つたのではない、始めもなき以前より絶對の尊き佛様が娑婆世界の吾々を救ふが爲に、時をはかつて三千年前に迦毘羅城に御降誕になつたのである。さうして普通の人間のやうな様子を示して、示同凡夫といつて、凡夫に似たやうな相を示されたけれども、それは衆生濟度の方便であつて、このお釋迦様の大慈悲と吾々との關係といふものは、三千年このかた漸く始まつたといふやうなものではない、吾々が生死流轉の舊い／＼昔より、本佛の慈悲は幾度か吾々の上に被さつて居るのである。即ち日蓮聖人が「法華取

要鈔に説かれる如くに、

此の土の我等衆生は五百塵點劫よりこのかた敎主釋尊の愛子なり。(釋迦遺文)

五百塵點劫といふのは始なき久遠を指すのであつて、申さば算へやうもない生れかはり死かほりを繰返して、吾々の生命の始めなき以前より流轉を辿つて居る、思へば永きことである、六道流轉のその迷といふことも、千年萬年億萬年、どの位舊い事とも知れない流轉を辿り辿つて今日に來て居る。その舊い始より佛の方では大慈大悲を以て吾々を救はんとせられるけれども、如何なる惡業の因縁か、如何なる吾々の不覺であるか、今日に至るまでその本佛の大慈大悲を感發することが出來なかつたのである。即ち「不孝の失に依つて覺せず」といつて、佛の方は少しもお息みなく吾々を感みたまふけれども、不孝の子はその父を忘れて永き流轉を辿つたのである、思へば不思議の事ナンである。さうして今度吾



等が生れかはつて他の世界へ行つて、お稻荷さんもなければお不動さんもないやうな所に生れ變つて行つても、本佛釋尊はその吾々の生れて行つた所にやはり大慈悲の光を現し下さる譯である、如何なる所にも所謂隨逐化と申して、母親が子供のあとから跟いて廻つて、子供が縁側に行けば落ちては危いと思つて縁側に行き、火鉢の傍へ行けば火を掴んだら危いと思つて火鉢の傍に跟いて行つて、背後から氣をつけて居るが如くに、釋尊は今後も絶えず吾等の上に就て慈悲の光をお與へ下され、結局は畢竟化といつて、最後はこの本佛の手に依つてのみ吾等は救はれるのである。如何に逃げ歩いて、如何に不孝不覺であつても、本佛の大慈大悲は無限の時間を通して間斷無くはたらくことに於て、最後は如何なる惡業の者も遂に救はれるのであるといふ風に、その過去は久遠を貫き、未來は如何なる永劫の末に至つても本佛釋尊の慈悲は吾等を救はずんば已まぬといふ

ことを考へるのが、それが「始成」といふことではない、「久遠實成」といふことである。始成であつては「本」といふ字を附けることが出来ない、久遠實成の本佛を信じて、本感應といふ根本より感應の慈悲は來て居る。未來永遠の慈悲は吾々と關係を斷たぬといふ、時間を貫くといふ所に「本感應」といふことがあるのである。

それから第二の「不同の故」といふのは、これはその處に依つて、例へば安養世界の衆生は阿彌陀如來に縁があるとか、淨瑠璃世界の衆生は藥師如來に縁があるとかいふことは、それは唯一時中間の話をするのである。ちようど譬へて見れば、尾張の人は尾州の殿様の家來だ、廣島の人は淺野侯の家來だといふやうな譯で、各藩の大名を自分の主人だと思つて居つたやうなものである、それが明治維新に於て王政復古となれば、各藩の大名はその封祿を奉還して、日本國民は悉く 天皇陛下の忠良なる臣民で

あつたが如くに、藥師如來、阿彌陀如來といふが如きものは、本佛釋尊を知らざる藩閥の諸侯のやうなものナンである。だから王政復古に依つて各藩の藩主は今日は華族といふ名を以て、陛下の民として存在して居るけれども、その當時の領主といふことは拂はれて、領主の資格を喪つたものである。壽量品の顯本に依つて本佛が顯れたとき、安養世界も本佛の化境であつて、阿彌陀如來のものではない。一時の領主であつて竟にその資格を奪はれるものが、これが不同なるものである。

今までの多くの佛教の信仰は、皆部分々に區域をつけて、少しづつの衆生と縁があるといふことを言ふのである。併しそれは即ち第三の「拂はるゝが故に」で、壽量品が現はれたならばその資格といふものは皆奪はれてしまふものである。壽量品に來れば時間は三世を貫き、空間は十方法界を通して、如何なる世界の衆生でも本佛釋尊の愛子ならざる者は

ないのである、一應は娑婆世界といふけれども、それは壽量品の本意に依らない思想である。娑婆世界を有縁の世界と一應言ふけれども、往いて言へば有縁も無縁もない、一切本佛釋迦如來の化境である。それ故に壽量品には、  
常に靈鷲山および餘の諸の住處に在り。  
と説かれた、靈鷲山といふのは娑婆世界を指す、餘の住所といふのは十方法界を指すのである、上の文句に依れば  
娑婆世界乃至餘處の百千萬億那由佉阿僧祇の國に於ても衆生を導利す。

と説かれて居るが如く、盡十方法界をつくして本佛釋尊の御化導ならざるものはない、それで初めて絶対といふことになるのである。時間は三世を貫き、空間は十方を盡して、初めて絶対といふのであつて、そこに時間に餘りがあつたり空間に残りがあつたならば絶対といふことは言へない。それを徹底し

なければならぬ、それが眞の哲學宗教の心得方ナンである。何處かに残つた所を拵へれば、その部分に變つたものゝ存在を認めなければならぬ。ところが壽量品はその點をハツキリ説き切つてある、時間は始なく終なく、三世を貫き、空間は盡十方法界を貫いて説かれた、この意味といふものが一切の宗教の中に他には類例がないのである。これを日蓮聖人が涌出壽量の二品を除いては皆始成を存せり。

(七六六)

と仰せられた、その味ひを感ずる時に始めて日蓮聖人の有難さも、顯本法華の有難さもわかるのである。そふまで穿たずして唯ぼんやりお題目が有難いのちや、南無妙法蓮華經が有難いのちやといふやうな事を言つて居るのは、あまりに幼稚にして語るに足らざる者である。そんな事をいつ迄も言うて居るといふことは、あまりに佛教の教學といふものを知らない者である。

いさ少しわかり易くお話を進めて見たいと思ふ。吾々はいつとも釋迦様を有難いと考へるのであるけれども、併しそこが凡夫の哀しさで、いろ／＼の縁に觸れてその有難さを忘れ勝ちである。そこで病氣に罹つて危ないナといふやうな時になると吃驚して『あゝどうも弱つた、何とかして戴きたい……』といふやうな譯で、今更のやうにお釋迦様の救済の力に絶つて行くのであります。それも悪い事ではない、涅槃經を拜して見ると、さういふやうな病氣の縁を與へて道念信仰を喚び起すといふことがある。甚しきには恐ろしい夢を見せて『お前も信心して居つたけれども近頃はスツカリ懈けて無信心になつて居るぢやないか、巫山戯た奴ぢや』と言つて、怖い鬼が出て來て頭からガブツとやられて頭が半分ちぎれたといふ夢を見て、吃驚して眼が覺めた『あゝこれは夢のやうだけれども眞實にあゝいふ風な事が無いとも言へない』といふことを秘々と感じて、又信

そこで『本』といふ一字はさういふ風に始成ではない、久遠實成の如來である、又その教化の力は不同ではない、全法界である、さうしてそれは拂はれざるもので、その本佛のみが永遠に残つて、あとは一時の方便であつた、各藩の領主みたいなものであつたけれども、日本のあらん限り皇室の存在および皇室と國民との關係が論らざるが如くに、本佛と我等衆生との關係が變らぬといふことを明に認識したときに、そこに『本感應妙』といふ觀念がある、さういふ事が法華經では教へられて行くのである、本門の題目とか、本門の本尊とか、顯本法華とかいふ、その『本』といふ字はすべてさういふ尊き意味を含んで居るのである。本といふのは本元だナンといつて、大本教で言ふ大本、小本ナンといふやうな、さういふ素人くさいものではない、非常な教學の尊き意味を以て現はれて居るものである。

先づさういふ事を一つ了解して置いて、それから

心を喚び覺すこともある、といふやうな事が説かれて居りますが、それは何を縁としても、道念信仰が更に力強く喚び覺されるといふことは、非常に私は有難い事だと思ふのであります。

それに就ては今申す通り、いつも佛様が吾等を護つてお在で下される意味合を忘れないやうに、感應といふことに就ては前にお月様と水との話をしました、その關係をよく考へて、天月はいつでも天に光を輝かして居るのである——それも世間の天月は或は盈虧があつたり、雲に蔽はれたりしますけれども、壽量品の本佛の顯はれた意味から申せば、天月には一點の曇りもなく洵に明煌々として輝いてお在でなるのである。それがわからぬ間はこつちの心の不明のために天月を拜し得ないけれども、壽量品の教が顯はれた以上は、本佛の慈悲の光といふものは何物もこれを蔽ふことは出来ない、第六天の魔王と雖も本佛の慈悲の光を一分も妨げることは出来ない

い。この本佛の慈悲の光が吾々の上に被さつて居る、その中間には如何なるものも妨害し得るものはない。唯自分の心の方には僅かな事に依つて、人が下らない批評をしたとか、下らない話を聞いたとかいふ事の爲にも信仰の心が鈍つて、さうして盥の水の方はそれがこぼれたり、或は盥が顛覆へつたりする譯である。その點を始終日蓮聖人は心配せられた、だからそれを茶碗に譬へられて、茶碗に孔があつて居つたならば水は漏つてしまふ、水のある間は月が映るけれども、いつとはなしに茶碗に龜裂が入つて居つて、水が一パイあると思つて居たらいつとはなしに漏つて無くなつてしまつた、それでは月が映らないではないか。又茶碗に水はあるにしても、蓋をしてしまつて居れば月は映るまい、覆かへして置いても映るまいといふ風に譬められて居る。信心するやうでもその信心が時に依ると穴があいて居つて水が抜けるやうな事がある。私も統一閣へ永いこ

と行き居つたけれども、この頃はツイ忙しいものだから參詣をさせぬ」と言ふやうな人は、忙しいばかりではない、信心の方の水がスツカリ漏つてしまつて居るのである、大抵はさういふものである。それが又非常に淺ましい事である、一旦信心に入つた者が信退轉の罪といふものは非常に恐ろしいものである。親を知らない間は仕方ないけれども、親に引合せて貰つて「これがお前の本當のお父さんだ」「あゝ有難い」といつて、何十年目に邂逅つて喜んだ、さうして二三日は一生懸命に孝養を盡したけれども、又いつの間にか親を忘れてしまつたといふ事になつたならば、自分の親を知らなかつたといふ罪も恐ろしいけれども、折角引合せて貰つて又忘れたといふそこには非常な罪を生ずるが如くに、本佛釋尊の大慈悲を承つてそこに信念を發した者が、或る事情に依つて信心を退轉するといふことは恐ろしい事だと説かれて居るのである。

そこでどうしても月と水との譬を忘れぬやうにして、吾々が本佛を信じ、本感應を信するに就ては、月は初めより輝いて居るもので、水さへあればいつでも映るのである。さうしてその水といふものも、ナニも他所から借りて來なくとも自分の心の中に湧くのである、心の奥の泉、それは開けば滾々として湧き出るところの清水のあることを知らなければならぬ。それが實に人間の尊い所である、有難いといふこともそこに在る。一つは佛様がいつでも光を放つて下されること、一つは如何なる落魄した、如何なる腐れ果てたやうな者でも、心の奥を鑿てばこの本佛の感應を迎へるだけの清水が滾々として盡きないといふことが、吾々人間の有難い所である。それは人の心の奥には皆佛性といふものを有つて居つて、この本佛を憶がれる不思議な關係があるのである。さういふ物の不思議といふものは根本から存在して居るものである、其ものゝ有つて居る

不思議の力といふものはどうすることも出来ない、さういふ事は世の中に澤山あることである。例へば硝子のやうな物を載るといふことは、小刀のよくきれるのでも、正宗の刀を以てしてもナカ／＼載ることとは出来ない、けれども彼の金剛砂といふものを以てそれにスツツと線を引いて置いてバキンとやれば、なんぼでも載れる譯である。さういふ風な關係の事柄は世の中に一パイある、物の相合して不思議な力を生ずることは、他の物ではどうすることも出来ない。素人が考へるとあの硝子を眞直に載るといふやうなことはナカ／＼骨が折れるやうだけれども、硝子屋の小僧を連れて來れば、金剛砂でスツツ／＼と線をつけて、バキン／＼と美事にやつてしまふ。さういふ風に因縁相合すれば不思議の力を現はすといふことが世の中には澤山ある。人間が生れるといふことでもサウでせう、よく考へて見たならば、男女相交つて子供を拵へるといふけれども、これが

ナカ／＼不思議な事である、チャント顔には目鼻があつて頭には髪の毛が生えて、十人が十人同じやうな人間を拵へるといふことは、どんな方法を以てしても殆ど出来得ないやうな譯だけれども、併しどんな白痴でも子を生まれさせればチャント生むだらう、どんな無教育な、山の中で大きくなつた娘でも、子を生まれといふ娘はない、それは考へて見れば不思議なことである。因縁の熟するところ、本来不思議の力の發現するところといふものは、事々物々の間に幾らでも存在して居るものである。「あんな白痴な娘が子供を生むナンといふ事が出来るものか」と言ふとさうでない、牡丹餅はヨウ拵へなくとも子供は立派に拵へる、そこが妙である。それと同じやうに、吾々は他の事に就いては學者になるとか、聖人になるとかといふことは出来なくても、本佛を慕うて信念の奮發するところ、必ず尊き佛様に成れるといふ不思議な力を有つて居るのである。そこをよく見透し

て、一番大事な尊き佛様と感應を結ばしてやらうとして御はたらきになつたのが、久遠の昔より今日にいたるまで續いて居る一番有難い本佛釋尊の大慈大悲の御力といふものである。

それ故に佛の力を信すると同時に、自分にさういふ不思議な力があるといふことを大事に考へなければならぬ。丁度日本には、日本民族の國民精神、所謂大和魂として、その根本は永い歴史の關係と、及び天孫民族の優秀なる性質とに基いたものではあらうけれども、大和民族には一種の尊き忠君愛國の精神を傳へ來つて居る。それが今日はだん／＼亂されんとして來ては居るけれども、まだ／＼それは少數のものである、大多數の日本國民は、皇室の聖徳を慕ひ、又我が祖國日本を愛するところの精神といふものは決して消えるものではない。他の事にはそれほど偉くなくても、例へば鐵砲を擔いで行き居るあの兵士に就いて、それが知識の上にとりいふ尊さを

有つて居るか、それが勇氣の上にとり位の尊さを有つて居るかといふことを個人的に調べたならば、一たび軍服を脱がしたら、博奕を打つたり端唄をうたつたり、夜遊びをしたり、カフェーへ入浸つたりするやうな者が多いかも知れない、併し軍服を着せて、さうして一朝事有つて我が祖國の爲に闘はなければならぬといふ戦場に臨んだならば、世界中のあらゆる國民よりも勝れて忠君愛國の行動を現はするのである、それだけは一種特別なものを有つて居る。あんなに毎日博奕を打つたり、カフェーに行つては錢を拂はずに逃げ出すやうな奴が、どうして國家を愛するナンといふ大きな精神が出て來るものか……それはその場合には成る程道理のやうに聞えるけれども、併しその人間が皆戰場に行つたならば忠君愛國の偉大なる男性的道徳を現はするのである。そこでお互ひも、他の事では、例へば嫁の尻を掴つたりするやうな事から考へると、ナカ／＼佛様などに成れさ

うもない、正塚の婆さんの親類のやうだけれども、一たび掌を合せて本佛に向へば、その尊き佛性を顯はすことが出來るといふものを有つて居るのである。それだからと言つて安心してひやみに悪い事をしてはいかんけれども、他の事に比例して「こんな者がどうして佛様に成れるものか、人間としても一人前にいかぬやうな者が佛に成るなどといふことは不合理だ」と言つてしまふことは出來ない。そこに大きな真理がある、それをお釋迦様は見透されたのである。世間の學者や理窟家は、他のさういふ小さな所に拘泥つて居るから、この尊き意味がわからなかつたのである。私は幸に日蓮教學を研鑽したために、その事が非常に鮮明に自分には領解つて居る、その點を考へると如何にも有難い、自分はまことに詰らない者ではあるけれども、佛性の自覺と本佛の御力との結びつく所、絶對の覺に達することに一點の疑を存し得ないといふ歡喜は、私は確實にそれを

握つて居るのである。さうしてそれには信の力を籠めて、何者にもこの観念は破られないといふことを自ら誓つて居る次第である。

それ故にいつでもあなた方が覺醒するのは何かといつたならば、お釋迦様が今茲に吾々を護つて下される、如何なる他の障礙があらうとも吾々を助け導いて、この世も大體無事に終り、さうしてその前途は佛様にまて導いて下される、現世安穩、後生善處の救済は必ず來るものぢやとこふことを確實に信じて行かなければならぬ。それは誰に對して信するかといへば、今茲に肉眼を以ては拜し得ないけれども、信仰の心の中にはアツ／＼とその生ける佛様を見得るのである。その生ける佛様を認めるといふことが最も大事なところである、それは一切の御遺文を通じての大事な點であります、特に今一、二箇所これを證明して置くならば、「本門戒體鈔」といふ御遺文の中に、

信仰の眼を以つては、茲に來臨影壽というて、チャント尊き佛様がお出でなされるといふことを實感しなければならぬのであります。であるから日蓮聖人の如きは、龍の口の頸の座の時に頸が斬れなかつたことに就いても、

慈父大覺世尊、代らせたまひしか。  
と言はれ、或は佐渡ヶ島に於て雪の中に埋もつて居つても、

衣を以つて覆はせ給まふとは懇ろの儀なり。  
といふ風に、いつでも本佛釋尊の實在を信じて居られた。或は又

暮れゆく空の雲の色、有明方の月の光までも心をよほす思ひなり。

と言はれて、夕暮の雲が美しく彩つて居れば、あ、彼處に本佛は在しますかと思ひ、夜明の月が煌々と輝いて居るのを見れば、あゝいふ美しい光を本佛は今も吾々の上にお與へになつて居るかといふことを

靈山淨土の釋迦如來、誓の音に應ずるが如く、清水に月のうつるが如く、法華經の戒を自誓受戒する時必ず來りたまふなり。然らば則ち何ぞ生身の釋迦牟尼如來を捨て、更に等覺、元品未斷の四依等を用ひんや。(維摩遺文 一八八二)

と書かれて居ります。これはどういふ事かといへば、誓の音に應ずるが如く、清水に月のうつるが如くに、法華經の信仰を捧ぐる者が自誓受戒といつて、佛様の前に誓を立て、この信心を貫き通すといふことを申上げたときには、必ずその生きた佛様がお出で下さるのである。生身の釋迦如來——生身といふことは、今吾々の肉眼では見えぬけれども、茲にチャント生きた佛様がお出で下されるといふことである。この「生身の釋迦如來」といふことをハッキリ信じなければならぬ。今の御遺文のすぐ次にも、生身の釋迦如來を以つて戒師と爲す。(同 一八八三)とある。釋迦如來は今涅槃して居られても、吾々の

聯想して、始終心をもよほすといつて釋尊を渴仰せられた。その感じは實に宗教としての最高觀念である、世界中の宗教を集めてもその意味を除いては宗教の生命は無い、他の教義がどの位よく整うて居らうとも、その情緒の綿々たるものがなかつたならば、宗教としては亡び行くものである。真宗や基督敎はその敎としては不完全なものだけれども、眞宗の信者が阿彌陀如來を念ひ、基督敎徒が基督敎の神を憐れるその感じといふものは、非常に情の上に於て強く現はれて居る。基督敎では聖靈の感應といふことが唯一の信仰の生命である、眞宗では阿彌陀如來が吾等を救ふべく御來迎といつて迎ひに來て下されるといふことを信じて居つて、それが信念の中心になつて居る。併し法華經の壽量品に依つても、本佛が吾等を救ひたまふ意味合は、さういふ點に於ては少しも違はぬのである、基督敎の聖靈の感應も、阿彌陀如來の來迎も、少しも意味の違つたものでは

ない。いつでも釋迦如來は吾等を來臨影響してお護り下さつて居る、聖靈の感應よりモツと親密なる意味に於て、即ち月の清水に宿るが如くに、いつでも感應したまふものである。さういふ事は基督教で言うても法華經で言うても同じことである。「聖靈の感應は基督教のことぢや」、「佛の來迎は眞宗のことぢや」と言ふけれども、さうではない。彌陀の來迎は眞宗のこのやうだけれども、本佛の來迎はより明かなことである、聖靈の感應は基督教のことでありけれども、本佛の感應は、更に完全な意味に於て、本感應妙を説き切つたものである。さういふことが今までのやくざな學者には殆んど傾解されて居ない。さうして實に愚にもつかぬ議論に依つて、この尊き教の生命を打忘れて居つたのである。

吾々の眼の前に、生ける佛が在せりといふことが實感されて、初めてそこに信念の生命がある。さうしてそれは「五百塵點劫よりこのかた教主釋尊の愛

つて居る。だから親鸞上人の考へた光明如來、南無不可思議光如來といふものは、光だけであつて姿が無いかも知れぬ、基督教の神も、形なくして在ざる所なしといふから、瓦斯みたいなものかも知れぬ。けれどもそれは彼等が絶對人格者の實在を論證するだけの哲學的思想を有たぬからして、淨土門でも基督教でもそこへ逃げ込んで居るのである。具體的實在といつて、チャント吾々が渴仰するところの人格のある尊き佛の存在を説かうとすれば、哲學上實在の説明をしなければならぬ、それだけの教義學問が阿彌陀經にも聖書にも無いから、そこでそんな所へ逃げ込んで、形なくして在ざる所なしとか、神は外に在るにあらすして内在する、心の内に在るといふやうなことを言つて居る、それは皆逃げ込んで、王様が雪隠詰めを喰つたやうな話である。學問理論のために、宗教の一番大事な王様が逃げ歩いて、行方不明のやうな状態になつて居るものである。日蓮

子なり」といふて、本佛の愛子として、優しい親に可愛がつて戴くやうな心持になればそれで宜しいのである。そこには難かしい學問もナニもない、本佛に對して戀慕渴仰の心を喚び起せば宜いのである。肉體の爲にはこの世の父母が洵に慈悲の源である、けれども無限の生命の前途までも恐れみたまふ、生命の永遠の父母は本佛釋尊であらせられるといふことが、よく解りさへすればそれで事足るのである。それに就てその佛様の存在の形式といひますか、どういふ風な佛様がござるのかといふことを、モウ少しハツキリと考へて見なければならぬ。佛様といつてもどんなものだから、唯ボンヤリして居る人が多い、又形なくして唯さういふ言葉だけあるやうに思つて居る人もある、けれどもさういふものではない。基督教の神は形なくして在ざる所なしと言つたり、或は親鸞上人は、阿彌陀如來は光明如來である、光の姿にて在ります、色もなく形も在まらずと言

聖人の本佛の實在に關するお考は、「親心本尊鈔」あたりとその事を強く論ぜられて居る、今私が事柄しく言ふことではない。それは法華經の壽量品に於てのみ、その人格の實在——まことに尊き相であり、一切を完備した存在であるといふことを説かれるのであります。

その存在の形式に就ては、章安大師が涅槃經會疏に於て説明せられたところの、涅槃の五果を考へて壽量品を見ると、その通りに壽量品の説き方がなつて居る。涅槃の五果は「常」といふことを説明するのであるが、常はいつでも存在して居るといふことで、哲學上の「實在」といふ言葉も同じである、常住不滅といふことであるから、壽量品にも「常住此說法」「實在而言死」といふやうに、「常住」と「實在」といふことは字は違つても意味は同じことである。始もなく終もなく、いつでもそこに存在せられて居るといふことが「常」といふことである。その常住

の形式はごういふ風な有様でござるか、今の瓦斯のやうなものであるか、サーチライトみたいな風にしていつも御座るかといふことに就て、常の内容を説明したものが涅槃の五果と申して、佛様の涅槃常住の果報に就ての五つの形式であります。この涅槃經の常住の五果の説明といふものは、實に一切經を通じて尊きものである、それは法華經と同じ價値のある涅槃經にして初めて説き得るのであります。阿彌陀如来や藥師如来や大日如来などの所では、サツバリアさういふ事がわからぬ。大日如来などは如来と言つて居るけれども、だん／＼釋ねて行くとき水であるとか、火であるとかといふものになつてしまふ。さういふものの常ならば、別に宗教を信じなくとも、水は水で自然に常である、又常であつてもなくとも少しも關ひはしない。吾々人間が死んだならば、血は水となつてしまひ、骨と肉とは灰になつてしまふ、併し灰になつても滅なりはしないのだ……そんな

な事で常といふことが満足が出来たらば、ナニも宗教は要りはない、犬でも猫でも灰になつて存在して行くのである。吾々人間の宗教的欲求といふものは、魂あり、姿あり、この生きてはたらいて行くところの人格といふもの、破壊を恐れて居る、そこに宗教があるのである。そんなことも關はないで、唯だ水となつて、灰となつて存在するのだ……そんな事を昔は言うて居つたが、これ皆思想の不透明の致す所である。

それは西洋の哲學などもだん／＼我國に入つて来て、實在の様式といふものを論究することが進んで参つたお蔭で、非常に佛敎の研究の上にも便宜が多くなつて來た譯である。さうしてそれ等の現代の知識を綜合して考へるときに、壽量品の教義、日蓮聖人の唱道といふものが一層光輝を増すに至つたのである。

それではその常の五つの形式は何であるかといふ

命、色、力、安、辨

の五つを申すのであります。實在の形式といふものは第一に「命」といつて生命を有つて居らなければならぬ、泥濘の水とか、火葬場の灰とかいふものになつて存在して行くならば、存在しようが存在しなからうが、そんな事を問題にする必要はない。「焼かれた灰を大事に甕に入れて保存して呉れて居るであらうか」……そんな事を考へる人があるかも知れんけれども、それは物好といふものぢや、焼いた灰が川に流されようが、土の中に埋められようが、そんな事は大した問題ではなからう、子から言へば粗末にしてはならぬといふことが出て來るけれども、本

人から言へば焼かれた灰に對して欲望はない筈である。どうしても問題は生命である、だから常住といふことを言ふには、第一に命が續いて行くといふことだから考へなければならぬ。併し命だけあつても前に言ふサーチライトみたやうになつて生きて居るといふことは、吾々の欲せざる所である、幽霊になつて生きて居る、形は見えないが死んでは居ない、併し物を言ひたいと思つても言ふことは出來ない……といふのでは、その存在は満足さるべきものではない。そこでどうしても生命があれば色質といつて、「からだ」といふものを要求するのである。又一切の天地間に在るものは、色心不二といつて、本當に調べて見れば、生命といふものと色質といふものと離れ得ない關係に在るのである。(その事は又難かしい話になるから今日は略いて置きます)それであるから生命があり「すがた」がある、佛様の生命は吾々のやうに途中から奪はれない、即ち常住といつてい

つ迄も生命が続いて行く、色質は即ち微妙第一の色  
 といつて、吾々のやうに病氣に罹つたり、途中で敵  
 がよつたりするものではない、いつも美しい、微妙  
 最第一の尊き相を維持することが出来るのである、  
 又自由にその相を變化することも出来るのでありま  
 す。さうしてそれには力が無ければならぬ、唯美し  
 いけれどもヒヨロ／＼して居るのでは仕様がな  
 何事でも爲さんと考へたるころの事は成し能ふと  
 ころの力といふものを有つて居る。その力あるが爲  
 めに他から冒されない、安全である、他から突かれ  
 たらヒヨロ／＼する、押されたら泥溝に陥るといふ  
 のでは駄目である、如何なる力にも對抗して決して  
 安全を喪はない。而してこちらから進んで成さうと  
 すれば其事を爲し能ふ、即ち「辨」は處辨するとい  
 つて、どうかしてあの人間を救つてやりたいと思へ  
 ば竟に救ふことが出来る、斯様にしたいと思へばそ  
 の事が出来るといふ、自由自在の力といふものを有

つて居る。斯様に生命があり、色質があり、力があ  
 り、安全であり、事を辨どげるものであつて、初め  
 て存在の價値があるのである。

そこで佛様といふものは、すべて立派にこの五つ  
 のものを具へて居られる。たゞ生命があるといふば  
 かりではない、そこに智慧があり、慈悲があり、實  
 に美しい珠の如き御心と、さうして美つくせること  
 ろの御相と、無限の御力と、一切を具へてそれが不  
 滅の状態に御座るといふのが、本佛の實在であらせ  
 られるのである。吾々がこれを渴仰して感應を得た  
 る結果は、自分に本來有つて居る無限の尊さを顯は  
 して、竟に同じ佛様に造むことが出来る、それを成  
 佛と申すのであります。斯様な意味に於て吾々は佛  
 様が生身といつて、生きて吾等の前に御座ることを  
 渴仰して居るのが毒量品の信仰であります。  
 それ故にこの一旦得たる信仰は、容易にこれを喪  
 はないやうに、大切に守つて行かなければならぬ。

一旦結構な信心ちやといふことがわかつて、縁に  
 觸れ、障礙に遭うてそれを棄てるやうではいけない。  
 い。その事は日蓮聖人が「開目鈔」(八頁)に、涅槃經  
 の文を引かれてよく警められて居るのであります  
 が、涅槃經には、或る女が他家の厄介になつて居つ  
 た、ところが子供が生れた爲めに、家主が出て行け  
 と言ふ、子供を何處かへ遣つてしまへば宜しいけれ  
 ども、子供を連れて居るならば出て行けと言はれ  
 た。その女は子供を棄て、自分が留まることを欲せ  
 ざるが故に、遂にその家を出てしまつた。何等の準  
 備もなくして出たが故に、途中で或は風に吹かれ、  
 雨に打たれ、寒さに襲はれ、或は毒蟲に螫されると  
 いふやうな事の爲めに非常な困難をしたけれども、  
 而も子供が可愛い、といふ一念でそれを耐へて來  
 て、終ひに大きな河を渡らなければならぬことにな  
 つた、子供を抱いて河を渡りかけたところが、途中  
 て非常に流れが急になつて來た、子供を棄てれば自

分だけは助かるけれども、其儘で居れば子供も自分  
 も溺れてしまふといふことになつた。併しその女  
 は、子供を棄て、自分だけ生きる氣がしない、遂に  
 子供を抱いた儘、大きな河に流されて死んでしまつ  
 た。ところがその母親はこんど生れ代つて、梵天と  
 いつて、三十三天の中一番上に位する尊き所に生  
 れたといふことが、涅槃經に説いてある。それに就  
 て章安大師は涅槃經の會疏の中に、唯だ女が自分の  
 子供を可愛がるからといつて天に生れるといふこと  
 は、常の性相に似ずといつて、因果應報の理から考  
 へたらごんなものかと疑はれるやうな事である。併  
 し如來の聖教に詐はない、茲に女人と説かれたの  
 は、女人はいろ／＼の缺點があるやうだけれども、  
 女人は優しい心を有つて居る、所謂慈心といふ子供  
 を慈しむ心が徹底して居る、たゞ自家を逐出されや  
 うが、毒蟲に喰はれやうが、恒河に沈まうが、この  
 一子を捨てることは出来ないといふ、最後の最後ま



で慈悲の心を貫き通したがために、天に生れる力がその慈悲の心の中にあるのである。慈心の絶対の尊さといふものは、普通の因果應報の關係などで細々しく小理窟を並ぶべきものではない、慈心絶対といふことに依つて、あゝこの子供は可愛いといふ心も、その優しい心の徹底といふ所には廣大な力があるといふことを説かれて居る。

その女人が一子を捨てざりしその優しい考の如くに、いま法華經を信する者が佛様に對してその優しい心を有たなければならぬ。子が親を慕ふといふ方もやはり優しい考である、親から子に向へば無論やさしい考であるけれども、子が親を思ひ、親に孝行するといふことも、やはり同じ慈心と慈心の交換である。だからお釋迦様は慈悲の心を以て吾等をお救ひ下される、その慈悲の心に感激して、お釋迦様の有難さに對して吾等はやさしい考を捧げて行く、

す。自分の心の中に佛を有難く思ふ、その本佛に感激して居るところの信心、それが即ち了因である。ちやうど譬へて見れば、女が子を生むべき素質のあるのが正因である、それがいろ／＼の榮養物を攝つたり、温泉へ入つたりするのが縁因である、さうして善き良人があるのがそれが了因である。子供が生れるには女の體質も大事であるし、榮養も大事であるけれども、良人がなければ子供は出来ない。吾等は本來佛性を有し、あらゆる善根を積むと雖も、本佛釋尊の大慈悲と感應せざるに於ては、成佛の子といふものは生れないといふことになつて居るのである。

それはちやうど國家に就て申しても同じことで、どれ程善い考があつても日本國民の國民道徳から言へば、皇室の尊嚴、聖徳に感孚する精神がなければ、日本人の資格といふものは完備しないのである。例へば幸徳傳次郎が親に孝行であつたとか、師

そこに絶対の力がある。普通の小理窟はその間に挿むことは出来ないであります。その事を開目録に説かれて、涅槃經に女人が一人の子を捨てなかつたといふのは、今吾等法華經の行者に就て言へば

一子とは法華經の信心、了因の子なり。(上同)

と書かれて居るのであります。法華經の信心といふことは普通に誰も言ふことであるし、ボンヤリ考へられて居りますけれども、この「了因の子」といふことが大事な點なんである。これは詳しく言へば長い話になるけれども、今の女人は一人の子供を捨てなかつた、いま法華經の行者が捨てない子供は何を指すかといへば、了因の子である。「了因の子」とは、どういふことかといへば、吾等が本來有つて居る佛性を正因といひ、いろ／＼の善根功徳を積むことを縁因と申す、それに對して了因といふのは、前に申す尊き佛を有難く考へて、佛に感激して居るところの本感應の心、これを了因の子と申すのであります。

匠思ひであつたとか、學問があつたとか、やさしい男であつたとか、幾ら美點を並べても、皇室を呪ふ考を持つては彼はやはり非國民である。どの位善根を積んで居るとか、お經を澤山讀むとか言つても、絶対の本佛釋尊に感激せず、これを罵り、或はこれを壓倒せんとするやうな者は、たどひ頭が坊主であらうが、御祈禱をいくらしやうが、それは眞の佛教徒とは言へぬといふのが、日蓮聖人の主張であります。これを家庭に就いて言うたならば、善は早く起きて商賣を勉強するとか、ナカ／＼人にも愛想がいゝとか、儉約をして借金をしないといふやうな事があつても、父に對する孝心を缺いて居つたならば、その息子は決して完全なる息子とは言へない。親を本當に大事にするならば、少々ぐらゐ朝寝坊はしても、それはやはり善良なる息子といふことが言へるやうなものである。吾々人間の無限の生命から考へたならば、宇宙の絕對者たる本佛釋尊の大慈悲に感

乎感激する精神に生きた者を以て、最も尊きものと  
 するのであります。それを今の夫人が子供を手放す  
 ことが出来ないと言つて最後までその子供を大事に  
 したやうに、あなた方が本佛釋尊を有難く考へたそ  
 の佛を信する信念を護つて、如何なる故障が起らう  
 とも、どのやうな難儀に會はうとも、むしろそれが  
 爲めに命を失ふとも、お釋迦様の有難いといふ考を  
 捨てなければ、その信念の徹底するところに、佛に  
 成り得る力が保證されて來るのであります。

さういふ意味に於て本感應といふことを考へて、  
 さうしてその意味が非常によく整うて申し分のない  
 といふことが、「妙」といふ字の意味になつて居る。  
 感應といふことを根本より説いて、それに就ての説  
 明、それに就いての教が實に完備して居るといふこ  
 とであります、それが「本感應妙」として法華經の  
 壽量品に現はれて居る事でありませう。一言にしてい  
 へば、いつも尊き本佛釋尊がお護り下さされて居ると

いふことになるのでありますけれども、私がかんごと  
 病中に、本佛に對して特に祈願を籠めて、どうぞご  
 の病氣を治して戴きたいとお願ひしたのは、その本  
 感應妙を信じて祈願を籠めた意味でありましたか  
 ら、それで今日は特にそのことをお話致したのであ  
 りませう。

南無妙法蓮華經。

教主釋尊は既に五百塵點劫より已來、妙覺  
 果滿の佛なり、大日如來、阿彌陀如來、藥  
 師如來等の盡十方の諸佛は、我等が本師、  
 教主釋尊の所從等なり。天月の萬水に浮ぶ  
 是れなり。乃至此の多寶佛も壽量品の教主釋  
 尊の所從なり。此の土の我等衆生は五百塵  
 點劫より已來、教主釋尊の愛子なり。

(法華取要鈔)

天風三萬里紀行 (其九)

小林 日種

青島より天津 (前承)

五月二十日

果しなく廣い、海を渡り盡くして午後一時漸やく  
 太沽に着いた。迎えが出てゐるものやらどうか不安  
 で堪らない、同船した國岡氏が

「私と一緒に不出でなさい、私には多分會社の自動  
 車が來てゐる筈だから、それで天津迄連れて行つて  
 上げる」と言はれた時には心から嬉しかつた。埠頭  
 に船がいよいよ着いたがどうもそれらしい人が見當  
 らない。

失望したり悲觀したりしてゐると、

「小林さんは誰方ですか」ハツと思つて返辭をし  
 た。見れば小林日種師御出迎えと大書した紙旗を携  
 えた一團がある。此の場合飛びついて握手して好意  
 を謝したいやうな親密の情を覺えた。太沽から天津

迄は二時間程の距離である、白河の流域で、汽車の  
 窓から廣漠たる畑が見える、支那人は農事に熱心と  
 見えてよく手入されて居り、畝の長さも三町か五町  
 もある様である。耕作するのに馬と牛とを一緒に使  
 つて居る右に馬左に牛を自由に使つて居る様は一寸  
 珍奇である。

天津驛で國岡氏一行と分れ、直ちに妙法寺へ急い  
 だ。言ひ遅れたが、支那の汽車に延着は附物で有つ  
 て、我等は太沽の驛でしびれの切れる程待ちくたび  
 れたものであつた。その爲妙法寺に着いたのは黄昏  
 であつた。聞けば内田師はお氣の毒千萬にも朝から  
 驛で待つて居られたさうだ。

天津驛の雜沓は遙かに奉天大連を凌駕し、北部支  
 那の殷盛を偲ばしめる。

此地は元、一八六〇年の北京條約によつて開放せ  
 られた開港場で、北京を去る八十餘哩、白河口を溯

る四十餘哩、市街は白河の兩岸に跨り、東は渤海の要衝に當り、北は北京の咽喉を扼し、背後に直隸千里の太平洋を控え、南は津浦鐵道によつて揚子江流域の物産と、安徽、江蘇兩省の富を集め、更に山東鐵道によつて山東一帯の物資を吸集し、猶ほ、京奉鐵道によつて西比利亞、滿蒙に通じ、真に東洋有数の商港で有るのみならず、貿易港としては、背後に横たはる貿易區域の廣大なる支那開港場中第一と稱せらるゝ要津である。只惜しい事は、近年泥土流下の爲、大型船の白河湖江が不可能となつた爲、自然、船客物資が太沽に集散するやうな形になり、その爲、太沽の發展と膨張は眼まぐるしきものあり、天津としての大なる備みである、且つ唯一の途は開鑿の外は無いのだが、白河は別名を九十九河と稱せられ、水源より河口まで迂餘曲折、實に九十九、百曲に一折不足の故に之を百河と稱せずして白河と云ふておる位の面倒な河だから、人工開鑿は絶望と謂はれてゐる。白河の水がその名に背き水淺く濁り、天津の將來に、樂觀すべからざる暗影を投じてゐると云ふ事が言へる。

餐は妙法寺信徒のレストランで認め、中原公司七階から全市街の夜景を眺め、佛國祖界の殷賑な道を素見して歸つた。

## 九、天津より北平

五月廿二日

朝十時田代領事より御迎えを受けその官邸に内田師と共に赴いた。副領事の小西氏も招かれて其席にあり、款談盡くる處を知らなかつた。

晝餐の饗應を受けた後、辞去し、それより、段祺瑞氏の秘書である、前司法總長姚震氏邸を訪づれた。田代領事から通じてあつたので、

「どうぞ、こちらへ」と直ちに應接室に導かれた。

氏は日本に十何年ゐたとかで殆ど日本人と少しも變らない位、巧みに日本語を話す事が出来る。用件は段祺瑞氏會見の事に在るので、明日の午前十時と約束して辞去するに際して、救世新教々綱、救世新教教義、大學證釋上下、並びに風徽伯張安道真人の凡著に係はる鬼神論及び氏の肖像や筆蹟等の數々を贈

此夜は妙法寺に宿つた。

五月廿一日

青島でセルだつたが此處では全くの盛夏である。白地に着更えたり夏帽子を買つたり怪しい思ひをし

た。朝、領事館に田代領事を訪問した。田代氏は田代義徳博士の令息で、縁を辿つてみれば全然知らない仲では無い。同氏の斡旋で非常なる便益有つたは申す迄も無い。

特に、宣統皇帝と段祺瑞氏に會見したき希望ある旨を語りその諒解を得た。

それより居留民團事務所、京津日々新聞社、天津日報社、駐屯軍等を歴訪し、一先づ歸宅の後、午後からは古風な馬車を仕立て、各國租界、並びに租界附屬の公園を巡歴した。

河北、總督衙門の西邊にある李公祠は建物の宏壯なのを以て聞えてゐる一名所であるから是非行つてみたいと思つたが、折柄、兵士が宿泊してゐて、それが日本人と見ると、不穩舉動に出るので、とても危険で行かれないこの事に、やむなく割愛した。晩

られた。

當地駐屯歩兵隊の講演は午後七時からあつた。林中佐の挨拶有りたる後『軍人精神の發揚』の題下に語つた。講演果て、後、武内中隊長や、本池副官等と晩く迄款語した。

五月廿三日

約束の午前十時に一分も遅れないで、姚震氏に伴はれ、内田師と共に段祺瑞氏邸に赴いた。應接室は段氏の書齋と兼ねてゐるらしく、廣い伽藍とした部屋で、中央に四角な紫檀の卓子が置いてあり、卓子の上には花模様布が掛けてあつて、そこに銀製のキラ／＼光つた灰皿や、煙草入れが置いてあり、窓には硝子が張つてあるが、支那風の障子窓で、綺麗な刺繍の壁掛けが吊してあり、部屋の入口には大きな衝立が嚴として聳えてゐて、主客の談話中にも食事中にも其處から、足に手の届くやうに恭しく一禮しては、銀製の盆に、訪客の名刺を載せた、家令らしい男が、十數回出入したものである。

卓子の正面に段氏が着座し、余はその向ひ側の紫檀の椅子に、そして左には内田氏、右に姚震氏が着

席して、先づ初対面の挨拶を済ましてから姚震氏の通譯で、種々なる問題について語り合つた。「同信の友」と云ふ事を、屢々口にせられた。眞に遠來の同信の友を、いはばり遇する隔意なき舉措と言動であつた。

「日本の僧侶で、閣下と交つた人、又、現在交はりつゝ有る人、又、閣下が面接された僧侶の中で、今猶ほ、閣下の御記憶に在られる人々が御有りだらうと思ふが、誰人達で有るか」

私が斯う問ふた時に、さしも他の事では、誓の物に應ずるやうに、明快に應答されてゐた段氏が口籠つて雲時、黙想して居られたが、

「現在交はつてゐる人は無い、曾て會つた宗教家はかなり多數だが、一人も記憶に残つて居る人は無い」と言切られた時には、佗びしい心地と共に意想外の思ひがした。

段氏會見の顛末はその折、手記して、東京日々新聞に寄せて置いたので、今はそれを便宜、轉載して置かう。

「予が早稻田出身の利けもの前司法總長、姚震氏の

案内で、前大總統段祺瑞氏を天津日本租界の別邸に訪うたのは五月廿三日の午前であつた。氏は予の往訪を喜び、予に正道居士、正道居感世集上下の三冊の自著を贈られたるのみならず、正道居士の一節を書して予に與へられ且つ簡素なる食卓にて晝餐を馳走された。(段氏は有名な佛教信者で有るから、料理は支那に珍しい精選料理であつた)。

會談三時間餘、歸るに際し支關にて紀念撮影を爲し、固き握手を交はし、明瞭な日本語で、

「左様なら、御機嫌よう！」といはれた。此の老偉人の聲は今も予の耳底に残つてゐる。

その時の談話の一節に次ぎのやうな言葉が有つた。

由來、東洋は差別の天地である。西洋は平等の國である。理智にたけたる西洋は、社會關係を横にまとめるに強い、情に厚かりし東洋は社會關係を縦にまとめるに長じた。

何もこれは世の創めからこんな區別の有つたわけではあるまいが、西漸した文明と、東進した文化が因習の久しき裡に、知らぬ間に目立つ程の差別が生

五月廿四日

内田師の案内で東門街に天齋廟を探つた。一向に寺らしいもの、無い所をやつと探して、閨を跨ぐと、こは如何に中は理髮店でその傍に一寢臺があつて願符の生へてる一佛が立つてゐるばかりである。説明を聞くと、

これは觀世音の木像だが未だ得度しない前だから髻があるのだとは笑はせる。店主の話によると、警察の敷地の爲に廟が奪ひ去られて今はこの有様ださうである。

大悲廟から達磨禪林へも詣でた、伽藍とした室の中央に達磨の木像が安置してあつて、其傍に等身大の婦人像がある。寺僧が、これは達磨大師の奥様だと、何かの間違だらうが實に滑稽千萬である。

先施公司等の盛り場を一巡して歸つた。夕刻からは檀家總代の人々等が續々見えられ、控室で雑談してゐる裡に、定刻にならない内に早くも廣い妙法寺の本堂が一杯になつた。内田師、開會を宣し、余は「日蓮主義の眞髓」の題下に晩く迄、滿幅を吐露した。五月廿五日

したのである。さて人と人、國と國一切をまとめて行く社會の根本原則は如何、これは縦の糸をもつて、まどむべきであらうか、或は西洋流に横の糸で綴るべきであらうか。予輩は今の南京政府は從來の東洋獨特の縦糸を一切切つて仕舞つて西洋式の赤い鮮かな横糸のみで錦を織らうとしてゐるものだと思ふ。されどそれは決して成功するものではない、殷鑑遠からず、これを歐洲の大戦に見よ、延いては現在變り行く革命後のロシアに見よ、南京政府が三民主義を謳歌してゐるが予輩は之を厭ひ、大同主義の政治こそ、新しき支那の指導原理となり得るであらう事を信じてゐるものである。

次々に送り出る言葉が皆、情熱に燃ゆる憂國の言葉であつて、古稀を越えた老政治家が憂國の精神を忌憚なく言語にして吐き出す、實に一種、凛烈の情に打たれざるを得なかつた。

夜の講演は居留民團主催、天津日々新聞、天津日報の兩新聞社後援の元に、公會堂に於て開かれた。民團理事の松本文三郎氏の開會の挨拶有りたる後、余は「社會貧無き理想境」の題下に語つた。

午前十時、内田師、村上戈市氏等に見送られて天津車站より北平行き列車に投じた。

天津を出てから五時間、漸やく北平に近付くにつれて停車場の構内に駐まつてゐる軍用列車が殖えて来た。鼠色の小倉服に赤の肩章と襟章とを着け、皆一様に木綿地の黒い支那靴を穿いた支那兵が貨車の中に充満してゐた。——是等は皆、蔣介石の命を受けて、最近、叛旗を翻えした馮玉祥討伐の爲、河南に向ふ兵である。

その兵の大部分は悉く若い青年で、十三四位の少年も數多く混つてゐた。殊に自分が深い感慨に搏たれたのは、かうして小倉の制服を着て無名の戦争に行く紅顔の少年の身の上であつた。

車が劉村を過ぎると北京の外城の城壁が双眸の裡に墜ちて来た。

凹と凸と言ふ文字を代る／＼並べたやうな此の嚴めしい城壁が遊子の心胸に呼び懸ける情調には他に比類なき特異なものがあつた。

汽車が二十哩に及ぶと云ふ外壁を貫いて内に入るど、今度は處々に嚴めしい樓門が立つてゐる内城の

城壁が飛びかゝる様に車窓に迫つて来た。

線路の兩側は土造の低い民家と民家を繞る農園で、汽車は此間を一般に足り抜けて東便門の直下で左に急廻轉して城壁に沿ふて、ゆる／＼と速度を緩めて足り、靜々と正陽門車站に入つて止まつた。

雲霞のやうに群れてゐる數多い出迎え人の中での唯一人の私への出迎え人である、井上義澄君の御顔を車窓から發見した時には地獄で佛の思ひでホッとした。直ちに伴はれて氏の主宰してゐる東亞佛教研究所に赴き、奥様の絹子さんも御眼にかゝつた。

夕刻から御夫婦と私と三臺の俵を連ねて、城内の見物に出た。梶棒の恐ろしく長い春慶色に塗つた背の低い眞鍮の金具のピカ／＼した車で、それを梶棒を上げて走るの、御客は丁度、仰向けに寝たやうな形になつてゐて乗り心地はいゝ。

然し道の悪い事は無類で、ボカ／＼の灰のやうな道から、埃が火車場の煙のやうに渦巻き、暮のやうになつて飛んで來るので、絹子さんはベールを出して頭から巻きつけた。

私達の行つたのは、支那街の最も繁華な盛り場で、

どてつもない大きなトタン葺バラック建の建物の中が市場で、店が前比して居り、そこを出た所が、芝居小屋で、

「ジャンガ、ジャンガ、ジャンガ」と囁し立てゐた。

そのあたりには、いろ／＼の書館が有つて、黒い煉瓦壁に、赤紙に金文字で女の名前が張り出してあり、その文字が又、素敵にうまい。書館と云つても無論本屋ではない、妓樓の事である。

私達は赤い行燈が三つ段々に吊つてある、飯店に吸はれるやうに入つて支那料理を喫した、世界一だと誇稱してゐるだけあつて流石に、いつ喰べてもうまい。

繪葉書を買はうと思つて、書店へ行つた。これは本當の本屋である。然し安つばい石版繪ばかりで、本なども衛生小説など、銘打つて、いかゞはしいものばかりが多い。

興徳相著、日本人謀殺張作霖案と云ふ本が見當つたから、後の参考にもならうと思つて井上君の通譯で談判した所、正札貳圓の本をすぐに六十錢にまけ

た。(但し此書はその後基隆に上陸の際、税關より押收せられるの憂目に會つた)。

赤い着物を長い棹の先につけて屋根から突き出しているのは呉服屋で、バケツや藥罐を吊してあるのはブリキ屋、綿が丸めて網にくるんで吊つてあるのは綿屋であつた、文字の國でも文盲が多いと見えて凡て貨物で行くと云ふ寸法である。

時計の修繕屋には必らず入歯の看板が有つた。どつちも齒車の修繕だから兼業でも差支えないやうなもの、一寸おかしき氣がした。

簷に、白い板に土瓶から湯氣が出てゐる繪と何々と云ふ字が書いてある家で、中のテーブルには、どころ／＼に五六人づゝ固つて何か喰べてゐるやうでもあり、大きな痢聲を立て、ジャンケンをやつてゐるやうでもあり、妙な工合だから井上君に聞いてみたら、回々教徒の飯屋だと云ふ事だつた。

この宗旨の者は豚を食はぬのださうだから、豚づくしの支那ではどうしても特別の飯屋が出来なければならぬ筈だと肯けた。

北京の街の感じは要するに純粹の支那街の感じて

### ○常樂院日經上人御消息

(上總國二宮領に御誕生になりし日經上人の左記御消息云  
土氣本壽寺什寶で、文中「一返題目」とある共一が又同寺  
什寶とされ月日は慶長十年十月六日とあつて御消息と同日  
なり。)

便書賜り候 先以其許息災繁昌の由一段満足候  
我等事法華經の金言に出来ない途に不惜身命立行百  
年にも二百年にも不修どころの大行を日蓮聖人の  
立行のごとく受け大法難候間此の廣大之功德かん  
じ 上方中より愚僧に貴賤上一返題目を所望し  
かけ字の如くしてたまはり信仰申し一ふくにしよ  
しひらうをいたし候

我等事日蓮以來の大難にあい申候 京關東之法  
華之本寺上人たち大謗法の書物して利へ我等惡  
口申 彌々墮地獄たるべし  
妙立寺妙玄寺

ことづて申され候へ  
十月六日 日 經 花押

ある。此の街の人は日本人に媚びると云ふ事を知ら  
ない。否、その必要が全然ないのだ、彼等は彼等だ  
けで生活してゐる。否、生活して行けるのである。  
廢類の中にも過去を思はせるものがある、城壁の上、  
櫓の歪みの邊になびく雜草の一つ一つにも遠き昔の  
物語を胸中深く秘めてゐるやうな懐古的な情を  
帯びてゐる。然し、赤い小さい串團子のやうなもの  
を藁すばに刺してそれを擔ぎながら、ノソリノソリと  
歩いてゐる。ロートル(老人)のタン、ホー、ホーの賣  
聲にも、一輪車の柄を両手で握つて肩で調子を取り  
乍ら通る。荷を運ぶ辨髮のタリー(勞働者)のギャッ  
コノノといった音を立てる轍の軋りにも、怨嗟の響  
はない、たゞ自然の運命をよく觀念し切つた相であ  
る。

朝鮮から滿洲を経て始めて此地に來た日本人は、  
日本人、並びに支那人と云ふ語の内容がはた概念  
が、著しく違つてしまふ事に誰人もが氣附くであら  
う、それは、此地に來て内地との時差を必らず訂さ  
ねばならないやうに……。

(本篇は土氣本壽寺信徒小川毅君の秘藏する處、本文中讀み  
下らざる箇所あるも其意に基き披露せり。尙本篇は御消息  
の追書なれば、本文御持の方は御發表下され度經師研究の  
縁となれば自伝の本懐と思ふ。楓木顯正記)

追而 妙行寺の家申且那中本法院共晝夜此事申し  
含め候 千に一つも日經世に出られ候上は日本之  
法華宗諸門徒智者上人謗法の書物せられ候間  
口はあかせ申まじく候か

若露命しれがたく候間 其間に朝ばん出家衆も且  
那衆も祈禱祈願し 一致の手をはなる、やうにい  
のり居り候

日蓮聖人御書に  
迹門ノ所化ト本門ノ所化ヲ比況スルニ彌猴ヲ以テ  
帝釋ニ比スルニ尙及バズ

あそばし申候 迹門の題目となふるものは畜生  
よりも劣りたりとあそばし候 さるに劣る文を  
たのみかさ物し候 あさまし〜

法印 日 經 花押

### 記 事

#### ◎北米野口上人の通信

(第十一信)

謹白 各位皆々様寒氣之折柄彌御清稔奉大賀候小生  
壯健御安神可被下候  
先法悅之方面申上候、昨廿七日シカゴ大學にて日蓮  
聖人教義及日本文化に就て講演致し候、四大新聞は  
肖像をかゝげて日本宗教者歡迎之意を表せり。又去  
る廿一日はノースウエスター大學マークガバン博士  
に招待せられ晝餐をいたゞき席上七八名の博士達に  
紹介せられ大乘佛教及日蓮聖人教義に就て約二時間  
餘り談話を交換せり。

次に悲寒之方申上候、シカゴへ着せしは去る九日飛  
雪紛々之夜八時四十分頃でありました、寒氣零度以  
下十五六度(前後廿二三度迄下りし由)との事俄然翌  
晚風引き夜中に發熱肺炎かと驚き候、情ら思ふやう  
死ぬ事はかねて覺悟之事ながら病院へ入れられい

な薬など飲まれて死ぬのはいやだ、併しどうなるか分らぬ、そうならば荷物が亂れて居りては日本男子の恥否宗教者の恥なりと獨り起き出で荷物をかたづけ、金をまとめ死ぬばどうと順序をつけベットに横はり、日蓮聖人の佐渡雪中を思ひ日持上人の西北利布教を想ひ一生懸命に御題目を唱へました、不思議なるかな翌朝になり、熱は減退致しました。是れなれば大丈夫と真に雀躍して喜びました。併し夫より一週間以上十二三日臥し續けました、苦樂は真に繩の如くであります。

次にシカゴ發展之順序を申し上げます、シカゴは洲の中央(や、東寄)曠原地に位し寒さ暑さの地が(今現に米國第二位の大都市)どうして急に其大をなせしかと聞くに最初は毛皮の集産地次は森林伐材次は農業次は工業(今一秒時に何十臺の自動車製造會社も此洲之由)次に商業將來はミシガン湖より一大運河を造り太平洋太平洋に通じ(今二説に分れ居る事)五十哩四方の大商業都市を造る大計畫中の由其手始めに三年後(昭和八年)世界大博覽會を此地に開く由敷地の爲めミシガン湖畔をひろくと埋め居り

候、其時は宗教大會も開く由に候(日本宗教者は手にツパして待つべき歟)何に致せ物質豊富の米國は此様の事は大規模にやります、併し日本は是より大なる精神的否調節文化を持て居ります。世界を教ふべき大運動必要と存じ候。一兩日に紐育方面へ出て歐洲へ渡る都合に候遙に祈皆様之健康候。

南無妙法蓮華經

米國 シカゴにて

一月廿九日

日 主 拜

後援會各位貴下

今成中外記者殿

顯本教報記者殿

統一誌記者殿

他に教其他一々書狀差上候筈に候得共宜敷願上候知らぬ他國に萬端一人にてやる布教講演故多端御諒察願上候。

(第十二信)

謹白 各位彌御清穆奉大賀候、小生ワシントンにては大統領に英譯本尊及び聖語淨書贈呈(世界平和身心自省自覺の爲め)

○ワシントンの墓、歐洲大戰々死者の墓に回向し(世界平和運動)開會中の米國上下兩院の議會を訪問し(政治視察)議院内の食堂にて晝餐(社會視察)前大統領崇敬の大寺院を參觀(宗教視察)日本櫻堤を見(人情視察)出淵大佐の晩餐に招かれ政治外交軍縮社會宗教談を交換せり。

○フキラデルフキヤにては日本人墓、日本の志士高場長緒先生の墓(先人を回向して今人ヲ活かす爲)米國獨立閣に上り獨立の鐘を見(歴史研究)同胞數人に宗教社會談をなせり。

○ボストンにてはハーバート大學(學界視察)及び亞弗利加南洋東洋派遣隊を出して採集の陳列館を看(歴史及び人類學續物參考)及び當地の美術館を參觀(日本の美術品澤山あり、何時の間にか渡りしもの)せり。

○紐育にては日本人墓へ有志と共に花輪を捧げ回向(同胞日本人を復興する爲)夫より日本人俱樂部(上級部)講演及び日本人會(普通部一般)の爲日蓮主義講演開催。

○十八日コロンビヤ大學教授達に招待晩餐後日蓮主

義座談會を開き種々質問に答へ候處日蓮主義に共鳴よき英譯ものはなき歟と問はれ困り候、法華經及び御妙判のよき英譯も出來候はゞ米國は法華主義弘まる國と存じ候御努力願上候。

○今晚は印度人主催の會に臨み一場の講話を試み、明廿一日獨逸船ブレメン號に塔乘歐羅巴へ渡り候。先は久々書外また。皆様の御健康を祈候敬白  
南無妙法蓮華經

二月二十日午後四時半

北米紐育にて

日 主 拜

我等よりすれば西洋人布教の難きに非ず費用の難きかと存候、講演準備中の宿泊料自動車料等なり、一例は先日ワシントンにて一日午前十時半頃より午後五時頃まで自動車を雇ひ候處晝食を食へさせ十八弗(日本金の卅八圓弱)に候、今後外國布教團(傳導團、會社)を組織し良傳道師を送候はゞ功果著しきものと存候、然し小生日本人及白人に下種結縁の布教幾分出來候事は皆様後援の賜と深く感銘致居候。

あなかしこ

米國にはこう云ふ富豪がザラに有ります、東洋にも二百萬坪餘の建物世界中の學生。日本にもと存候。只今インターナショナルハウス參觀、主任エドモンド氏逢候ロツクフエラー氏一人の寄附、地所は別、後援會各位殿

### 教 報

#### ○東京統一團本部教報

△二月廿三日(第四日曜)午後六時半より例の如く統一團本部主催、會場本所太平町一ノ廿六協和會館に於て日蓮主義講演會開催、來會者新顔の人々十六名。初めに法要終つて、本田健二君の開會の辭に次で榎木顯正師の「立正安國論講話(其一)」終つて會員羽入田真人氏の「佛教の思想回」佛教の要義」加藤重太郎氏次で松岡林道氏の所感あり同九時富田顯道師閉會を述べて散會したのは九時を過する半であつた。(因に宣傳がスマー等は松岡、富田の兩氏盡力下さつた)

處難乘陶然として煩悩時の移るを知らず、病後の脱下としてはかなりお疲れの御様子であつた。來會者百廿餘名。  
△三月九日(第二日曜)(曇)午後一時半開會、知法思國會主催の國民教養講座第一回當日の講師は海軍中將佐藤鐵太郎閣下初めに本多理事長親下挨拶あり、次で閣下は「國防に關する信念と理解」と題して約二時間半、重大なる本問題に對して最も常識的に平易に講述され、聴講者八十餘名も熱心に傾聴した。終つて本多親下の代表質問なぞもあつて近來に無い有意義な講座で、來聽者の比較的少なかつた事を甚だ遺憾に思ふ。  
△三月十六日(第三日曜)(晴)午後一時半開會、初めに法要次で講演「宗教の本質より見たる佛教」と題して本多日生親下の二時間に亘る御講演があつた。當日は議員田中米吉氏の大衆人御尊像開眼があつた、來會者八十餘名。

#### 名古屋布教

一月八日 會館にて妙教人會新年始會原田日勇師講話、清水一乘師會計報告其重要論議終りて餘興式井中學校教師の教育講話福利ありて散會を極めたり。  
一月十五日 開目抄講義會館にて  
二月 五日 開目抄講義 同 原田日勇師  
同 八日 婦人會 法華經の聲 清水一乘師

同 蓮華に就て 原田日勇師  
同 十五日 開目抄講義(六百八人) 原田日勇師  
同 廿四日 菊井紡織女工講話 原田日勇師  
人際第一の寶 原田日勇師  
同 廿五日 豊田本社女工講話 同  
犧牲精神 同  
同 廿五日 正午半豊田織機男工(八百人) 同  
生活の安定 同  
二月廿五日 午後二時半 新川男工場講話 同  
(二百五十人) 平和と幸福 原田日勇師  
同 廿五日 午後三時半 野切女工場講話 同  
(二百六十名) 一心不覺 原田日勇師

#### 大阪教報

○二月八日 蓮成寺にて談話會  
○十二日 豊國寺にて「四苦八苦に就て」和井田氏「顯本法華の特長」京藤師  
○十六日 聖祖御降誕會午前十時豊國寺へ集合定刻前既本堂は立錫の地なし京藤山主導師の下に嚴肅なる報恩會を修し終つて一同隊伍を齊へ支那旗を先頭に中寺町を経て蓮成寺に着上田山主導師の下に法要を謹修し晝食後講演に移り「開會の辭」和井田氏、琵琶龍の口本

#### 金澤教報

○定例説教 二月三日釜屋本成寺にて 蓮華の如く 能仁一十師  
○清明婦人會 二月五日村木町にて 能仁一十師  
○佛敎講演 二月八日立正寺にて 富本會榮師  
○精神講話 二月八日市外森本村にて 能仁一十師  
○鐵道講話 二月九日十日兩日金澤鐵道クラブにて 勇敢なりし或る草草 能仁一十師

#### 千葉教報

十二月一日 常蓮坊、教化動員と佛敎 木村日香師  
十二月七日夜 眞名、龍源寺、教化動員講話 會、幻燈映寫並講話、出席者、山形英照、中村純道、長岡百應、竹内顯領、木村日香、前田信周教益甚大を認む  
十二月十二日 常光坊、教化動員講話會、挨拶



抄、同元教一師、國家財政の現況と國民の覺悟、木村日香師

同日 上野、妙興寺、信仰ミ生活 山本賢業師

十二月十八日 味庄、光明寺、兒童會 木村日香師

十二月廿五日夜 宇都宮、法華寺禮家、木村喜知次宅、佛教信仰の大綱 木村日香師

一月九日 常蓮坊、説教 木村日香師

一月廿六日 光明寺、兒童會、童話 木村日香師

一月三十一日 上野、妙興寺、教化勸員講話會、挨拶、山本賢業師、所感、木村日香師講話、野老布教師

二月九日 栃木縣、下澤、木村宅、靈性開發と法華信仰、木村日香師、教益甚大なるものありき。

二月十五日 光明寺 東西思想の融合 木村日香師

二月二十三日 光明寺、兒童會、童話二種 木村日香師

二月二十四日 當光坊、味庄區婦人會、心の開放を助け 木村日香師

二月廿八日 光明寺

信仰の普及と日蓮主義 木村日香師

護法護國

○本多親下が末だ御健康充分御恢復でないにも不拘、統一閣の日曜講演を始め地明會報懇談、恢弘會及び順道會等文でなく更に々々遠く地方にも御出講遊ばされる。人はよくいふ「あまり御無理遊ばさぬ様御大切に」と、併し自分達の都合ではどうか御來講をとすがつて来る矛盾さ！

況下は法國の御爲めにと更に先般國民教養講座を開演され一方には聽講者勸募にも御奔走される。或日の知きは猛雨盆を覆がへすやうな中を午日も御誘説運同される所謂「所作佛事未曾暫廢」の經文其儘で此活動劇を日撃し又傳聞する者は自ら省みて悔愧し發憤し精進せし居られようか！

○匿名の在京一特志家が全国の各圖書館等六十餘箇所にも本多親下著法華經要義を寄贈された事は時節柄一入寄符の義と深い感銘を與へられる。

○立正活映株式會社では、日蓮聖人第六百五十七遺忌を記念せんがため、大聖人御傳映畫の製作に全力を傾注してゐるが、今同美完全を期すべく各教團管長を始め、門下一同の協業合作の理想映畫とせんとして左記の通り出京を乞ひ一日の集會協議を熱望しつゝあり。

- 一、會日は昭和五年六月二十八日自午前八時至午後五時
- 二、遠隔の人々の爲めに二十七日晚より廿九日朝迄は賄料負擔
- 三、同上旅費は船車三等運賃の片道を支辨

右有志は来る六月十五日迄に京都市七條局私書箱第十一號同社宛に申込まれるべく猶詳細は同社に御照會の事。

○特志寄附 本誌愛讀者よりの御寄贈、難有御禮を申上す。

一金百五十圓也 無名氏  
一金五圓也 相馬布佐衛殿

誌料領收

自二月二十一日至三月二十一日

一金貳圓貳拾錢也	同	片岡商店	一金貳圓貳拾錢也	同	片岡商店
一金參圓參拾錢也	橫濱	寶藤勇吉殿	一金貳圓貳拾錢也	同	寶藤勇吉殿
一金貳圓四拾錢也	兵庫縣	伊藤泰助殿	一金貳圓四拾錢也	同	伊藤泰助殿
一金貳拾壹錢也	京都府	仁木次郎殿	一金貳拾壹錢也	同	仁木次郎殿
一金六圓也	大阪府	久場舎藏殿	一金六圓也	同	久場舎藏殿
一金壹圓貳拾錢也	大府	廣瀬調殿	一金壹圓貳拾錢也	同	廣瀬調殿
一金壹圓貳拾錢也	京都府	有田宏道殿	一金壹圓貳拾錢也	同	有田宏道殿
一金壹圓貳拾錢也	大阪府	岡島伊八殿	一金壹圓貳拾錢也	同	岡島伊八殿
一金四圓四拾錢也	北海	善應寺殿	一金四圓四拾錢也	同	善應寺殿
一金貳圓貳拾錢也	富山縣	毛見春吉殿	一金貳圓貳拾錢也	同	毛見春吉殿
一金五圓也	山梨縣	吉岡正太郎殿	一金五圓也	同	吉岡正太郎殿
一金貳圓貳拾錢也	旭川	熊谷友枝殿	一金貳圓貳拾錢也	同	熊谷友枝殿
一金貳圓貳拾錢也	千葉縣	田嶋ミチ殿	一金貳圓貳拾錢也	同	田嶋ミチ殿
一金貳圓貳拾錢也	兵庫縣	中村仲次殿	一金貳圓貳拾錢也	同	中村仲次殿
一金八拾貳錢也	鹿兒島	小玉小治良殿	一金八拾貳錢也	同	小玉小治良殿
一金貳圓貳拾錢也	福岡縣	福田亮慶殿	一金貳圓貳拾錢也	同	福田亮慶殿
一金貳圓貳拾錢也	東京府	片岡商店殿	一金貳圓貳拾錢也	同	片岡商店殿
一金貳圓貳拾錢也	東京府	大橋唐太郎殿	一金貳圓貳拾錢也	同	大橋唐太郎殿
一金貳圓也	同	平野甚四郎殿	一金貳圓也	同	平野甚四郎殿
一金九圓也	神戶	村山智全殿	一金九圓也	同	村山智全殿
一金八圓八拾錢也	同	福原喜太郎殿	一金八圓八拾錢也	同	福原喜太郎殿
一金貳圓貳拾錢也	東京府		一金貳圓貳拾錢也	同	
一金貳圓四拾錢也	同		一金貳圓四拾錢也	同	

右難有入帳仕候也

「統一」會計

### 國民教養講座(四月中)案内

先月より開催されし本講座は益々好評を博しつゝあり、本月講座は左の通りに有之、奮て御來聽あらんことを。

一日 時 四月十三日及二十七日 自後一時三十分 至四時

一會 場 淺草區北清島町 統 一 閣

一科目講師

一國際外交の常識 前編 遠大使 本多熊太郎氏

一マルキシズム對宗教の順進的考察 慶大教授 養田 胸喜氏

一聽講料、一科 金貳拾錢

但し教員、軍人、警察官は無料

昭和五年四月

### 知法思國會

### 念告

釋尊御降誕會度修並講演

來る四月八日晚

### 統一閣

皆様御誘合せて御來會下さい

本多猊下編

### 聖語錄

菊版半截 携滯至便 定價金貳圓

法華經及御遺文全般に亘り組織的に其樞要を彙類され布教にも信仰にも無二の寶典として僧俗の間に尊重されたる聖語錄は久敷絶版の處今回改訂版として發兌された、此際當所にて特に定價の一割引を以て貴書に應ず。

東京市外南品川妙國寺内

### 統一誌發行所

振替東京五一〇七一番

### 日蓮大聖人 肉筆御掛軸頒布 水鏡御尊影

辱 大僧正本多日生現下之御賛助



肉筆御掛軸壹口に付

會費金十六圓也

但代金引換の事

月賦(四回拂)金五拾錢増

外送料實費

尺三絹本中題金襴外題緞子 本式佛畫仕立表裝桐共箱付

大聖人六百五十年御忌に際し、實に國寶ともいふべき水鏡の御尊影を四條派の巨匠野村文學翁の高足であり、本宗歸依の名畫伯である原一明先生が齋戒沐浴、心血を注いで御尊影の原畫其儘を一々拜寫せる御掛軸を、前記の如き極めて低廉なる會費で御願ひすることは本會の矜とする所で、且之に依つて大聖人の御理想である廣宣流布の一助たるを得ば本會の歡喜本懐之に過ぐるものはありません、四方熱烈の信者諸士、此際奮つて御贊同の榮を賜り此大聖人の御尊影を永く御家寶として子々孫々に傳へられんことを熱望して已まざる次第であります。南無妙法蓮華經

東京市外巢鴨町一、〇九二番地

### 日蓮大聖人水鏡御尊影肉筆頒布會

電話大塚(86)二七六六番 振替口座東京三三七五三番

會規は御一報次第 直に送呈致します

本多狷下の三大名著

法華經要義

四六判 六百數十頁  
總振假名付  
定價 金 參 圓  
法華經の教義を整理し極めて平易懇切に講述せられ、今回特に賜天覽、供臺覽、空前の好著なり。

日蓮主義の心髓

四六判 三百五十餘頁  
總振假名付  
定價 金 壹圓 八十錢  
法華經要義の姉妹篇なり、日蓮主義の精髓を領得せんと欲する者の必須欲くべからざる良書なり。

日蓮主義精要

四六判 七百餘頁  
總振假名付  
定價 金 參圓 五十錢  
十二篇に分類し教義信條の整理歸結を懇説せるもの、誰人にも易々として理解の金鑰を與へらる、空前の指針、大燈明の賞讃あり。

「教」發行所

統一定價			統一廣告料		
一冊	金貳拾錢	送料五厘	表紙一頁	金貳拾錢	前金之
半冊	金壹圓貳拾錢	送料共	中一頁	金拾五圓	之
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共	四分一頁	金五圓	金

昭和五年三月廿四日印刷納本  
昭和五年四月一日發行 (第四百二十一號)

不許複製

編輯兼 磯部滿事  
發行人 鈴木日雄  
印刷所 東京府花原郡品川町南品川百八十一番地  
電話 高輪六〇二四番

發行所 統一發行所  
編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ  
振替東京五一〇七一番

目次

法國冥合……………	本多日生
天風二萬里紀行(其十)……………	小林日種
教化の總動員……………	濱口雄幸
記 事……………	
○日蓮聖人六百五十遠忌	
○英京野口上人通信	
○各地教報	
○誌料領收	

第三十五五年月號

